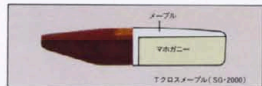


# YAMAHA CONNECTION

そのスーパーなバイブレーション

ボディの材質や構造が  
エレキリックギターに  
決定的な役割りを果たす。  
つまり、ボディは音源「生の声」。

ボディの材質がダイレクトに音に出るソリッドボディ。構造的には単一材からボディを削り出した単板構造と、ボディのトップとバックに異なる性質の素材を用いるラミネート構造がある。ヤマハのソリッドギターは、各シリーズごとに一貫したサウンドポリシーを貫くために素材を吟味・厳選。構造的にも理想的な完全ソリッドの削り出しボディを採用している。そして、ラミネートの原理はトップに固い性質の木を、バックに柔らかくて軽い木を用いること。つまり、トップが弦振動をガッチリとキャッチしてアタック感と音の張りや、バックでトップから伝わってきた音に深みやひろがりを出すわけだ。



●ラミネート構造はハンパッキングピックアップに不可欠だ。木々に固い木の単板にするとは身体への衝撃を、柔らかい木の単板にするとはワウの音の1つの音になってくる。

セミアコの場合、ボディ構造全体のバランスで音が左右されてしまうもの。現在のセミアコースティックモデルは、サウンドホールを持ちながらも中忠をウッドブロックで固めたセミソリッドなボディが主流になっている。ウッドブロックは空洞をもつギターに特有のフィードバックを抑え、ソリッドギターなみの音の立ち上がりや重なりを、ダイレクトスタッド方式のブリッジやナールビスをしっかりと固定する役割りもしている。ヤマハのセミアコSAは、中忠にメープルブロックをスプルースブレンドでサンドイッチした独自のコンビネーションブロックを採用している。さらに、SA-2000Sと1200Sでは表板にスプルース単板を採用。比較的硬い表板を用いた他の機種(SA-1000)のややソリッドな音に比べて、よりソフト&メロウな音を特徴としている。じつくりと弾き比べ、そして使い分けて欲しい。



フルアコはまず、生の音がしっかりしているかどうか問題だ。とくにボディトップの材質、厚さ、木目に対する採り方・削り方などにより音色がびっくりするほど変わる。たとえば、カーブドスプルーストップは厳選されたひとつのスプルースブロックから内部響板とも一体削り出す方法。アーチドスプル

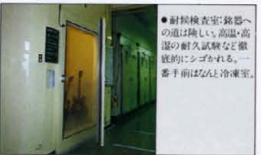
ース単板トップは一枚のスプルースを成型する方法だ。ヤマハのAEモデルはこれらの2つの手法がとられ、それぞれに特色をもった鳴りのいいボディを実現している。また、ボディ容積やボディトップ裏面の響板の位置や形状も音色を決める重要なポイント。



ここでマテリアル・スタディ、木はどんな音を出すか。〈メープル材〉：固く、密な木質は芯のあるタイトな音を生み、ソリッドハンパッカーのボディトップ材に不可欠だ。ネック材としても広汎に用いられる代表的な素材で、ステージでのライティング映えも申し分なし。〈マホガニー材〉：性質は柔らかく甘い粘りや艶のあるサウンドを生み、ソリッドハンパッカーのボディバック材としてよく使われる。ネック材としても多用され、メープル材と並ぶ代表的な素材だ。〈アルダー材〉：同じ柔らかい性質をもつマホガニー材の艶やかな粘りに対し、枯れたブロード感のあるサウンドを生みだしてくれる。エンダー社のオールモデルに使われ、幻のマテリアルとして有名なこのアルダー材を、ヤマハは独自のポリッシュのもとにSF、SJ、SC、BBの各シリーズに採用。〈ケン材〉：性質は比較的柔らかくクリアでずっとな音を生み、シングルポビックアップと好マッチング。ソリッドベースのボディ材としても活用されサウンドイメージにびたりした木地の美しさも魅力だ。〈スプルース材〉：性質はすこぶる柔らかく、立ち上がりや丸くあたたかなブロード感のあるサウンドが特徴。グランドピアノの響板にも使われる高級素材で、その響きは限りなくアコースティックだ。



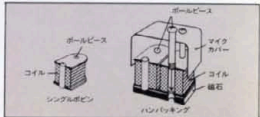
含水率8%と聞いて、ピンときたに相当なブリークだ。ヤマハのエレキリックギターは原木の製材から出荷するまでの間に6つもの乾燥工程を経ている。1年以上にわたる自然乾燥から塗装工程の間に行なわれるシーズニングまで、期間の差はあってもそれぞれが重要な意味をもっており、そして最終的にボディ材の含水率はさつちり8%まで落とされるわけだ。グランドピアノと同じ規準にまで1本1本がっちりいサウンド、安定したサウンドを得るための長年におたる楽器づくりの経験から得た、貴重なデータのひとつである。



●耐熱検査室 楽器の道は狭い。高温・高湿の耐久試験など徹底的にシグナルされる。一番手前がなんと検査室。

ボディサウンドが「生の声」なら  
ピックアップは、いわばボーカルマイク  
ニュアンスよく再現できるかどうかは  
やはりピックアップが問題だ。

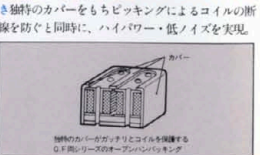
音量や高域・低域を電氣的にコントロールすることによって最終的にサウンドを決定づけるのがピックアップの役割だ。構造の違いによりシングルポビックタイプとハンパッキングタイプの2つのタイプがある。



シングルポビックアップはピックアップの基本的スタイルで、ポビック中央にポールピースがあり、その周りにコイルが巻かれた、コイルが1つだけのピックアップ。サウンドは中低域のすなわち高音域のシャープネスが身に土。ヤマハのシングルポビックアップはC、J、Rシリーズの3系統。中でもSCシリーズに採用しているパーマグネットタイプのCシリーズマイクは、ポールピースタイプと違って境界の切れ目がなく、シングルポビックながらダイナミックレンジの広さ・サウンドが特徴。傾斜方式のマウントにより、各弦のトーンバランスも絶妙だ。



高感度で境界が広いハンパッキングピックアップは、もとはといえば、シングルポビックアップを直列につないで磁極をマッチングさせることでハムを打ち消すように設計されたタイプだ。ピックアップ面積も広いので音がよく伸び、伸びのあるサウンドが得られるというわけ。さらにハンパッキングピックアップはマイカカバーの有無によってオープンとカーバードの2タイプに。オープンタイプはよりブライドで力強いハイパワーサウンドが、カーバードタイプはメロウで甘いの中に歯切れのよさを秘めたサウンドが特徴だ。ヤマハのハンパッキングは独自の着磁方式をとるアルニコ合金製。しかもシリーズごとにコイルアレンジを変えて、それぞれのサウンドキヤラクターを一層明確なものに。世界に誇るGシリーズマイクを筆頭にじつに5系統のピックアップがエントリーしている。とくにGシリーズ、Fシリーズの両オープンタイプは、セミオープンともいうべき独特のカバーをもちピックアップによるコイルの断線を防ぐと同時に、ハイパワー・低ノイズを実現

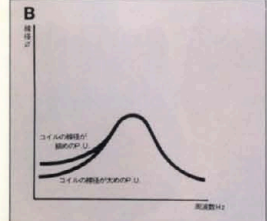
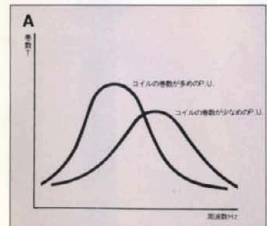


独特のカバーがブリッジコイルを保護する。また、コイルの断線を防ぐ役割も果たす。

ベース弦の強大なエネルギーを確実にキャッチするために考案されたのがWポールピースピックアップだ。1本の弦に2コずつのマグネットを対応させてあるため、ピックアップ面積、磁界がもたらされる感度も一段とアップ。全音域にわたって豊かで伸びのあるサウンドを再現し、サステインの効いたサウンドにも強味を発揮する。ヤマハのソリッドベースは、SBにはポールピースを直線的に配置した8ポールピースピックアップを、BB、PBには1-2弦用と3-4弦用のコイルをセパレートさせたWポールピースブリットピックアップを採用。とくにBBのB-1マイクは、1-2弦用をネック側に、3-4弦用をブリッジ側に、つまりリバーサルにレイアウトさせることにより、比類ない音程感を保証しているのだ。



コイルアレンジはサウンドアレンジのなめるといふべき、音色を決定する重要なファクターだ。たとえば同じカーバードハンパッキングでもソリッドギターにマウントされているLシリーズマイクとセミアコのAシリーズマイクではスペックがまったく異なる。この違いを生み出すのが「コイルアレンジ」。つまりコイルの巻数と線径の微妙なアレンジなのだ。一般的に、コイルの巻数が多くなれば出力がアップすると同時にピーク・低音側に移動する(図A)。また、コイルの線径が細くなるほど低域の出がアップする(図B)。ヤマハのピックアップは各シリーズごとに一貫したポリッシュのもと、ボディサウンドのニュアンスを活かした絶妙なアレンジがほどこされている。



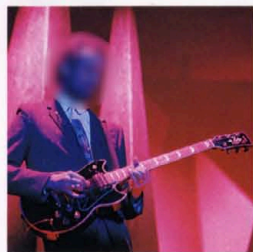
Johnny Graham (E. W&F) SG-2000



Al McKay (E. W&F) SG-2000



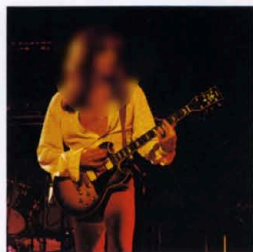
George Johnson (Brothers Johnson) SG-2000



Phil Manzanera (Roxxy Music) SG-2000



Roger Fisher (Heart) SG-2000, SC 1200



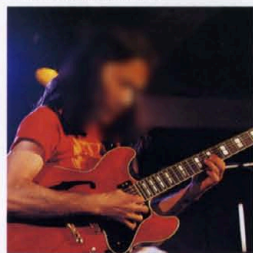
Scott Gorham (Thin Lizzy) SG-2000



Masayoshi Takanaka SG-1000



Yoshiaki Masuo SG-2000



Ryo Kawasaki SA-2000



Louie Johnson (Brothers Johnson) SB-1200S, BB-2000



Phil Lynott (Thin Lizzy) BB CUSTOM



Francisco Centeno BB 2000